

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	高井 優佳	指導教員 (主査)	丹 明彦

論文題目	女子大学生における顔貌への意識と承認欲求が化粧の効用意識に及ぼす影響
------	---

本文概要

【問題と目的】化粧の効用意識として、より魅力的に積極的に自己呈示するために化粧をする積極的効用と、より目立たなく普通に他者や集団に同一化し、その中で消極的に自己呈示するために化粧をする消極的効用が挙げられる(野澤・沢崎, 2007)。また、承認欲求は、菅原(1986)により、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の2種類に大別されることが示されており、賞賛獲得欲求は容姿と、拒否回避欲求は対人不安などと関連を示すことが明らかになっている(笹川, 猪口, 2012; 吉沢, 2012)。しかし、容姿において、拒否回避欲求との関連が見られる研究もあるため(浦上・小島・沢宮, 2013)、一概に賞賛獲得欲求のみが容姿と関連を示すとは言い難い。さらに、これまで顔への意識のみに焦点をあてた尺度は作成されていないなどの問題点が挙げられる。このことから、第一研究は、調査箇所を顔と限定し身体的容貌と区別するために、顔を一律「顔貌」と定義し、顔貌意識尺度を作成する。第二研究は、顔貌意識尺度を用いて、承認欲求と顔貌意識が化粧の効用意識に与える影響への検討、承認欲求と顔貌意識の関連について検討することを目的とする。

【方法】**第一研究**女子大学生 111 名に調査を実施し、有効回答 104 名(平均年齢 20.23 歳, $SD=1.6$)を分析対象とした。調査内容は、①フェイスシート(年齢, 学部・学科, 学年)②顔貌意識尺度③醜形恐怖心性尺度(大村・小島・中田・沢宮, 2015)④自意識尺度(菅原, 1984)**第二研究**女子大学生 294 名に調査を実施し、有効回答 275 名(平均年齢 19.29 歳, $SD=1.5$)を分析対象とした。調査内容は、①フェイスシート(年齢, 学部・学科, 学年, 化粧にかかる時間)②化粧の効用意識尺度(野澤・沢崎, 2007)③顔貌意識尺度④賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(小島・太田・菅原, 2003)。

【結果と考察】**第一研究**顔貌意識尺度について因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い、最終的に 15 項目 3 因子が得られ、「顔貌の欠点への修正行動」「顔貌への否定的意識」「顔貌意識による他者懸念」と命名した。結果の数値から信頼性が確認され、相関分析より併存的妥当性が確認された。**第二研究**承認欲求と顔貌意識を説明変数、化粧の効用意識を目的変数とし重回帰分析を行った結果、賞賛獲得欲求が積極的効用に影響を与え、拒否回避欲求と顔貌への否定的意識が消極的効用に影響を与えていた。その後、独立変数を承認欲求、従属変数を顔貌意識とし分散分析を行った結果、顔貌の欠点への修正行動では、それぞれ賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の主効果がみられた。顔貌への否定的意識と顔貌意識による他者懸念においては、拒否回避欲求でのみ主効果がみられた。このことにより以下のことが明らかになった。1. 他者から認められたい気持ちが強い人は、化粧をチャームポイントの強調や、理想的な自分に近づくためのものとして使用している。一方で、他者から嫌われたくないという気持ちが強い人は、引け目を感じないようにするため、仲間から浮かないために化粧を使用している。2. 自身の顔に不満や、極端に魅力を感じない人は、化粧を今の悪い状態から遠ざかるための手段として用いている。3. 他者からの賞賛を求め人や、自分を目立たせたい人は、自身の顔の気になる部分に対して化粧をし、より魅力的に見えるようにしている。4. 他者から批判をされたくない、目立つ行動をしたくないという人は、自身の顔の気になる点について細かく確認をし、ごまかしたいという気持ちがある。さらに、自身の顔について恥ずかしく思うことにより、外出する際に緊張してしまう不適応な要因となっている。本研究から、効用意識を消極的なものから積極的なものに変える重要性が示され、化粧を上手にして気になる部分をカバーすることが出来れば、自信が出るなどの積極的効用に繋がる可能性が示唆された。